

ぬ里といふべし。

〔秋苑日涉^七〕民間歲節下 廿日^〇後、家々曰、資具飲饌之料、以爲新年之儲、歲終春資之聲、比屋相接、市肆有以春資爲業者、其資圓如鏡者、曰鏡資、以資粘柳枝若枯柴、如貫珠者、曰資花^{キナガ}、似供神佛、又細切如方解石者、曰霞子^{アサノ}、曬乾至二月十五日、雜豆炒之、以供佛薦祖先、或以爲茶素、風土記曰、歲暮家家具餼、藪備宿歲之儲、以迎新年、范石湖集、村田樂府、冬春行叙曰、臘日春米爲一歲計、多聚杵臼、盡臘中畢事、藏之土瓦倉中、經年不壞、謂之冬春米、月令廣義曰、江淮俗、除夕烹飴兼數日之炊、於新年可支許時名曰隔年陳、歲除家戶競蒸資饅之類、亦資月餘、廣東新語曰、廣州之俗、歲終以糯粳相雜炒成粉、置方圓印中、敲擊之、使堅如鐵石、名爲白餅、殘臘時、家々打餅聲與擣衣相似、甚可聽。

〔東都歲事記^四十二月〕廿六日 此節より餅搗街に賑し其體尊卑によりて差別あれども、おほよそ籠、臼、杵、薪、何くれの物擣ひありき、備て餅つかする人、糯米を出して、渡せば、やがて其家の前にてむし立、街中せましと搗たつることいさましく、晝夜のわからなし、俗是を賃餅、又は引すりなどす、是を餅配りといふ、親戚に餅を送り、歲暮を賀す、

〔先哲叢談^四〕伊藤維楨、字原佐、號仁齋、^〇中 仁齋家故赤貧、歲暮不能買糯資、亦曠然不以爲意、妻踞進曰、家道有鞠、妾未嘗爲不堪、而獨其不可忍者、孺子原藏、未解貧爲何物、羨人家有資、連求不已、妾雖口能譙呵之、腸爲斷絕、言訖泣下、仁齋隱几閱書、一言不爲之答、直卸其所著外套、以授妻。

〔大江俊矩記〕文化六年十二月廿五日辛亥、家内餅春也、當年は今朝出勤故、午後ニ爲致、未刻頃よりむしに來、戌刻相濟、都合五斗八升也、家禮如例、ちん春、中町之安兵衛也。

〔坂井家日策〕天保七年十二月十二日、餅米貳俵取リニ遣ス、十三日、つき屋、餅米つきニ參ル、十九日、成瀬へ餅米つきに遣ス、^〇中 餅つききの者、日限承リニ參ル、廿三日、夕方餅つき參ル、

〔書言字考節用集^二時侯〕臘^{ラウ}日^{ジツ}說文、冬至後三成爲臘、風俗通、夏曰嘉平、殷曰清祀、周曰臘、臘者獵也、言田獵取獸、以祭祀其先祖也、